仙台市文化財調查報告書第178集

宮城県仙台市

郡山遺跡巡

一平成5年度発掘調査概報一



1994.3

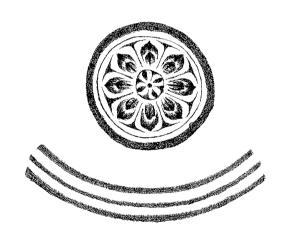
仙台市教育委員会

仙台市文化財調查報告書第178集

宮城県仙台市

郡山遺跡w

----平成 5 年度発掘調査概報-



1994.3

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は14年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代 史解明に一石を投じておりますことは、古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方に も御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端を現した昭和54年以来、継続的に進められてきた発掘調査により古代の文献に記録のない"幻の城柵"はまさに"甦る城柵"として私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度の調査では昨年に引き続き I 期官衙の材木列(塀跡)などが発見され、I 期官衙の様相が次第に解明されつつあります。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にありますが、そのような中にあって、継続的な調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くの御協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものでなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深い御理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成6年3月

仙台市教育委員会 教育長 東海林 恒 英

- 1. 本書は郡山遺跡の平成5年度範囲確認調査の概報である。
- 2. 本調査は国庫補助事業である。
- 3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 長島榮一 I、II、III、V、VI 熊谷裕行 IV

遺構トレース 菅井百合子、日比野園子、永田英明

遺物実測 稲葉俊一、熊谷、小佐野章子、菅家婦美子、吉田りつ子、伊勢多賀子 佐藤栄子

遺物トレース 菅井、日比野、菅家

遺構写真撮影 長島、熊谷

遺物写真撮影 稲葉

遺物補修復元 赤井沢千代子、洞口れい子

図版作成 永田、熊谷

編集は長島・熊谷・永田がこれにあたった。

- 4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置した N_0 . 1 原点(X=0、Y=0) とし、高さは標高値で記した。
- 5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
- 6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA 柱列などの塀跡 SE 井 戸 跡 SX その他の遺構

SB 建物跡 SI 堅穴住居跡・堅穴遺構 P ピット・小柱穴

SD 溝 跡 SK 土 坑

- 7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。
 - C 土師器(ロクロ不使用) G 平瓦・軒平瓦

E 須 恵 器 H その他の瓦

F 丸瓦·軒丸瓦 N 金属製品

- 8. 遺物実測図の中心線は、個体の残在率がほぼ50%以上は実線、ほぼ25~50%で一点鎖線、 これ以下は破線とし、網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。
- 9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(古山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

	序 文	
	例言	
I	は じ め に	1
II	調査計画と実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	···· 2
III	第 98 次発掘調査	4
	1. 調 査 経 過	4
	2. 発見遺構・出土遺物	···· 5
	3.ま と め	12
IV	第 99 次発掘調査	15
	1.調 査 経 過	15
	2. 発見遺構·出土遺物 ······	15
	3.ま と め	27
V	第 100 次発掘調査	29
	1. 調 査 経 過	29
	2. 発見遺構・出土遺物	31
	3.ま と め	36
VI	総 括	38
	調査成果の普及と関連活動	45
	写 真 図 版	49

I はじめに

平成5年度は郡山遺跡範囲確認調査第3次5ケ年計画の4年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調查担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 白鳥良一

管理係 係長 菅原澄雄

主任 村上道子

主事 齋藤英治

主事 佐藤寿江

調査第一係 係長 田中則和

主任 木村浩二

主事 長島栄一

教諭 熊谷裕行

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧(東北大学工学部名誉教授 建築史)

副委員長 工藤雅樹(福島大学行政社会学部教授 考古学)

委 員 岡田茂弘(国立歴史民族博物館 考古学)

千葉景一(宮城県多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長 歴史学)

須藤 降(東北大学文学部教授 考古学)

今泉隆雄(東北大学文学部助教授 歴史学)

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地 権 者 赤井沢久治、菅原一雄、菅原一幸、小林喜代治、小林広志、斎藤三雄

調査参加者 赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢千代子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤 貞子、大友節子、大友鶴雄、尾形陽子、小佐野章子、小嶋登喜子、小沼佳代 子、菅家婦美子、工藤ゑなよ、小池房子、小林テル、佐々木直子、佐藤栄子、 菅井百合子、高橋ヨシ子、千田あや子、永田英明、日比野園子、洞口れい子、 牧かね子、吉田りつ子

II 調査計画と実績

平成5年度の発掘調査は平成2年度から始められた「郡山遺跡範囲確認調査」第3次5ヶ年計画案にもとづく第4年次めである。計画案によれば今年度はII期官衙と同時期の郡山廃寺中枢伽藍東部の調査予定であった。しかし仙台市が計画している再開発事業との関連から昨年度に引き続き、I期官衙の南西部へと調査地点を変更したものである。これについては平成4年度の調査指導委員会で了承を得ている。発掘調査費については国庫補助金の内示(総経費1,700万円、国庫補助金額850万円、県費補助金額425万円)を請けたことから、次のような実施計画案を立案した。

調査次数	調査地区	地区予定面積	地区予定期間
第 99 次	I期官衙西部地区	350 m²	9月~10月
第 100 次	I期官衙南部地区	350 m²	10月~11月
計	2 地区	700 m²	9月~11月

表 | 発掘調査計画表

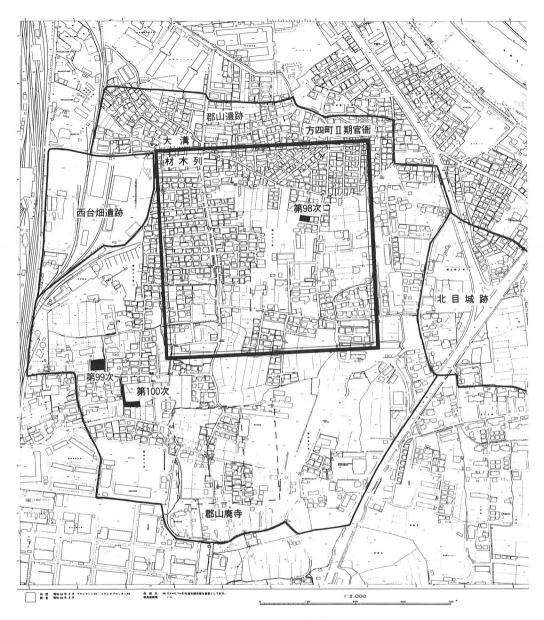
またこの他に関連遺跡の遺構確認調査として、燕沢遺跡の性格究明のための調査も併せて立 案(仙台平野の遺跡群)している。

事業開始にあたり郡山遺跡内で個人住宅の立て替えに伴って、方四町II期官衙の中央やや東寄りの地点で緊急に調査を行う必要が生じ、第98次調査も追加して実施した。なお個人住宅などの小規模な開発に伴う発掘調査は仙台平野の遺跡群で対応しているが、郡山遺跡での一連の発掘調査のための本概報に記載することとし、「仙台平野の遺跡群XIII」には概要のみを掲載している。

したがって今年度は以下のような内容で発掘調査を実施した。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第98次	II期官衙中央地区	60 m²	7月12日~9月1日
第99次	I期官衙西部地区	350 m²	9月1日~12月13日
第100次	I期官衙南部地区	180 m²	10月12日~12月17日
計	3地区	530 m²	7月12日~12月17日

表 2 発掘調查実績表



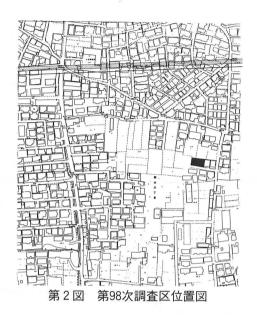
第1図 郡山遺跡全体図

III 第 98 次発掘調査

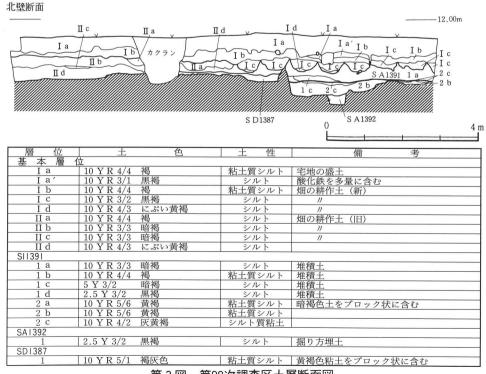
1. 調 査 経 過

第98次調査は、仙台市太白区郡山3丁目22-17 斉藤三雄氏より同地において、専用住宅新築に伴 う発掘届が平成5年1月18日付けで提出された。 したがって平成5年7月12日から9月1日まで 敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は方四町II期官衙の中央北東寄りの地点で、外郭北辺から南へ140mの位置にありこれまでに実施された第87次、第88次調査区に近接している。この周辺の調査ではII期官衙の中央部にありながら、I期官衙にかかわる遺構が多く検出されている。調査は建築される建物の基礎部分の深度が深いため、建物の範囲を対象に南北



7 m、東西 $13 \,\mathrm{m}$ の調査区を設定して実施した。なお盛土が予想以上に厚かったため、遺構を検出した上面では $60 \,\mathrm{m}^2$ の調査区となった。



第3図 第98次調査区土層断面図

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡 3 軒、土坑 3 基、溝跡 3 条、柱穴 1 、ピットなどである。調査区が狭小なため、ほとんどが遺構の一部を検出したにすぎない。

SKI383 土坑 長軸 1.26×短軸 1.15 m の楕円形の土 坑で、深さは 10 cm ほどである。堆積土は褐灰色粘土である。遺物は堆積土中から少量の土師器坏、甕片が出土している。

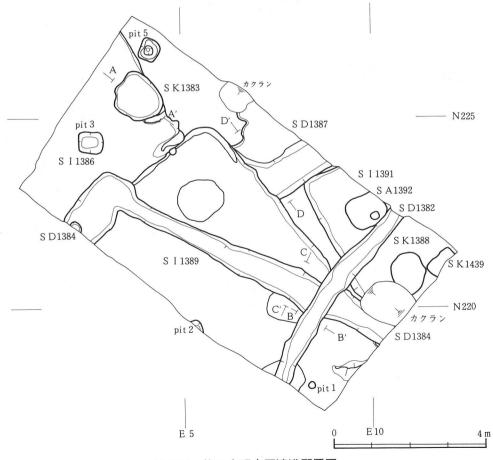
SI1386 を切っている。

第4図 SK1383土坑断面図

SDI382 溝跡 上幅 $45\sim52$ cm、下幅 $10\sim40$ cm、深さ $11\sim25$ cm、断面形は逆台形で壁は直線的に立ち上がっている。方向は $N-30^\circ-E$ である。調

査区の南壁ぎわで東にやや蛇行する。堆積土は黒色シルトである。遺物は堆積土中から土師器 坏、甕片が出土している。

SI1389、SI1391 を切っている。



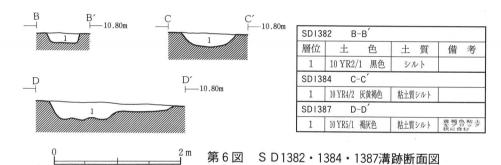
第5回 第98次調査区遺溝配置図

SDI384 溝跡 上幅 $45\sim115$ cm、下幅 $25\sim90$ cm、深さ $11\sim22$ cm、断面形は U 字形で壁は緩やかに立ち上がっている。方向は $E-19^\circ-S$ である。調査区の南壁ぎわで L 字に屈曲した南北方向となる。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトである。この溝跡を境にして、南では耕作による削平が著しい。遺物は堆積土中から土師器 C-725 坏(第 15 図 2)、両面黒色処理された土師器坏底部片を含む土師器坏、甕片が少量出土している。

SI1386、SI1389、SI1391を切り、SD1382に切られている。

SDI387 溝跡 上幅 $173\sim243$ cm、下幅 $54\sim120$ cm、深さ $22\sim28$ cm、断面形は深さ 10 cm のところで平坦となっており、途中に段を形成し底面にいたっている。底面はやや凹凸がある。方向は $N-61^{\circ}-E$ である。溝の西側の平面形が一定でない。堆積土は褐灰色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SI1391 を切り、SI1389 に切られている。



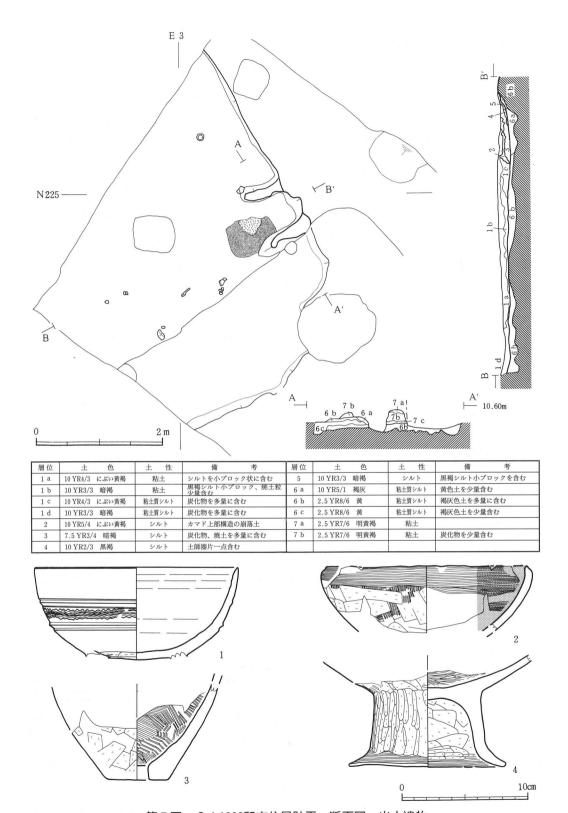
SII386 竪穴住居跡 東西 5 m 以上、南北 4.5 m 以上の隅丸方形と推定される竪穴住居跡である。北壁方向で $E-53^\circ-S$ である。残存する床面までの深さは $5\sim15$ cm で、堆積土はにぶい黄褐色、暗褐色粘土などである。北壁中にカマドが位置し、舌状にやや張り出している。カマドの前面に焼土と炭化物が集積している箇所がある。柱穴は検出されなかった。

遺物は床面上から脚部のケズリ痕跡が明瞭で、坏部内面が黒色処理された土師器 C-731 高坏 (第7図4)が、カマドのソデ構築土中から坏部外面に波状沈線の刻まれた須恵器 E-365 高坏 (第7図1)が出土したほか、住居の掘り方埋め土中からも土師器 C-726 坏 (第7図2)や C-728 甑 (第7図3)などが出土している。その他カマド内から土師器片、須恵器片が各2点、掘り方から土師器の小片が多量に出土している。

SI1389、SK1383、SD1384 に切られている。

図版	登録	種別	出	土地	点	ž	去 1	量(cm)			外	面	調	整				内	面		調	整		A40-	de	写真
番号	番号	器形	地 区	遺構	層位	器高	口径	底径		緑	部	体	部	底	部		縁	部	体		部	底	部	備	考	図版
1	E-365	須恵器 高坏	98 次	SK1383 SI1386		7.4	16.2		D	ク	П	沈	線	手持^	ラケズリ	D	2	D	п	2	п					30-2
2	C-726	土師器	98 次	SI1386	掘り 方		16.2		ナ		デ	ハケジ	メ→ケズリ			ナ		デ	ナ		デ					
3	C-728	土師器	98 次	SI1386 SI1389	掘り 方			5				ケ	ズリ						ハケ	Х→	ナデ	ヘラ	ナデ			30-3
4	C-731	土師器 高坏	98 次	SI1386	床面			12.5	坏ョ→	底1ケブ	部リキ	脚 → 9	柱 部テケズリ	脚ョニ	裾部アナデ	坏ミ	底ガ	部牛	脚ケ	柱ズ	部リ	脚 :	裾部ナデ			30-1

第3表 SII386 竪穴住居跡出土遺物観察表

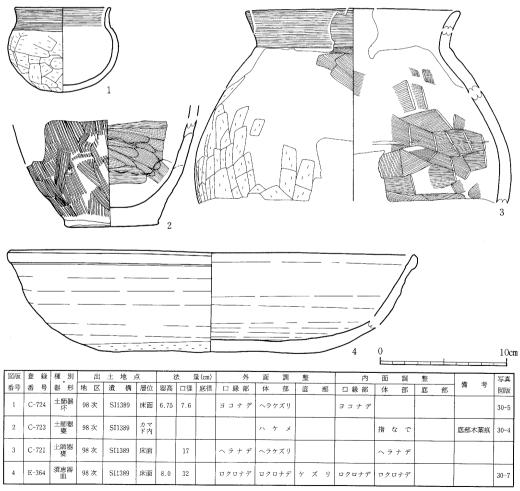


第7図 SI1386竪穴住居跡平・断面図、出土遺物

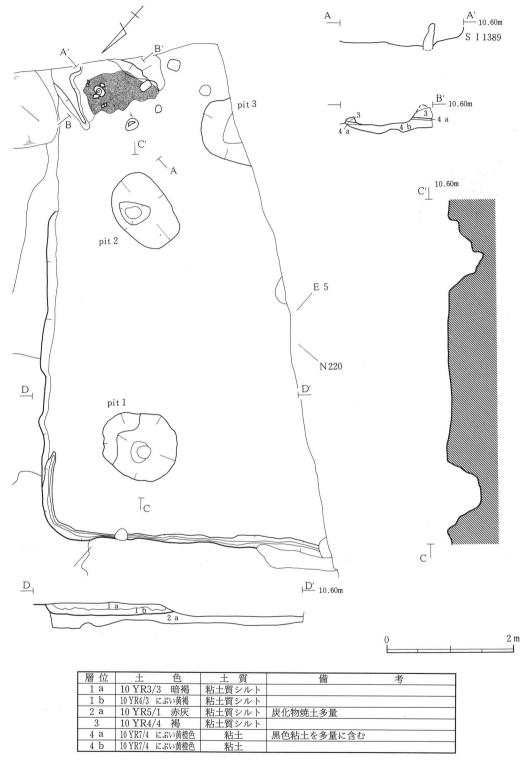
SI1389 竪穴住居跡 東西 7.5 m 以上、南北 4.4 m 以上の長方形と推定される竪穴住居跡である。北壁方向で $E-43^\circ-S$ である。最も良好に残存する床面までの深さは 15 cm で、住居南半は後世の耕作により削平されている。堆積土はにぶい黄褐色、暗褐色粘土質シルトなどである。北壁東端隅にカマドが位置していると推定される。カマドの燃焼部底面には石製の支脚が埋設されている。カマド内には焼土と炭化物が集積している。柱穴は $Pit\ 1\sim3$ まで検出された。 $Pit\ 1$ からのみ直径 20 cm の柱痕跡が検出された。

遺物は床面上から体部から底部にかけてケズリ痕跡が明瞭な小型の土師器 C-724 坏 (第8図1)、同じくケズリ痕跡が明瞭な土師器 C-721 甕 (第8図3)、外面ハケメ調整が明瞭な土師器 C-720 甕 (第8図2)、大型で深みのある須恵器 E-364 皿 (第8図4)、カマド内から外面ハケメ調整の土師器 C-723 甕片 (第10図2)、石製の K-27 支脚 (第10図1)などが出土している。その他堆積土1層や焼土中から土師器片が少量出土している。

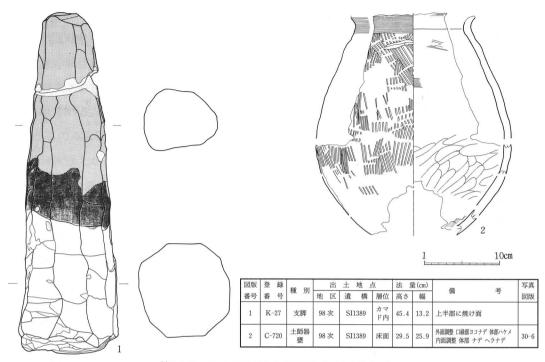
SI1386、SI1391、SD1387を切り、SD1382、SD1384に切られている。



第8図 S I 1389竪穴住居跡出土遺物(1)



第9図 SI1389竪穴住居跡平・断面図



第10図 S I 1389竪穴住居跡出土遺物(2)

SII39I 竪穴住居跡 東西 $4.4\,\mathrm{m}$ 以上、南北 $2.8\,\mathrm{m}$ 以上の竪穴住居跡と推定される。南壁方向 で $\mathrm{E}-56^\circ-\mathrm{S}$ である。残存する床面までの深さは $25\,\mathrm{cm}$ で、堆積土は暗褐色シルトなどである。 柱穴は検出されなかった。

遺物は堆積土第1層や掘り方中から土師器、須恵器片が少量出土したのみで、床面からは出土しなかった。

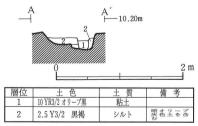
SA1392、SK1388 を切り、SI1389、SD1387 に切られている。

SAI392 柱穴 一辺 0.85×1 m の柱穴で、直径 20 cm の柱痕跡がある。掘り方の底面が柱痕跡の箇所のみ $6 \sim 10$ cm 低くなっている。掘立柱建物跡

の一部と考えられる。遺物は出土しなかった。

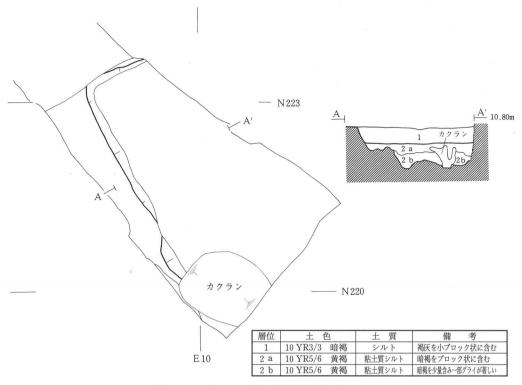
SI1391、SD1382 に切られている。

SKI388 土坑 長軸 $1.15 \times$ 短軸 $0.9 \, \mathrm{m}$ の楕円形の土坑で、深さは $50 \, \mathrm{cm}$ ほどである。堆積土は褐色シルトである。遺物は出土しなかった。なお発見された位置からSA1392 柱穴との関連も検討したが、柱痕跡が検出されな

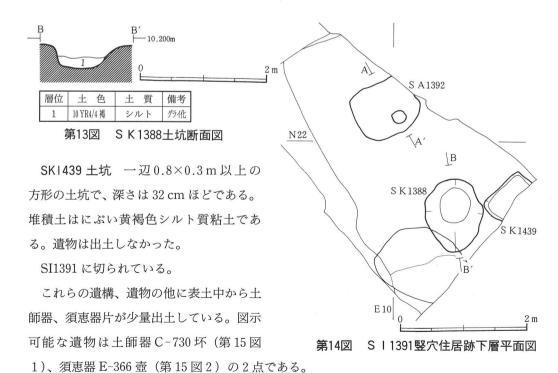


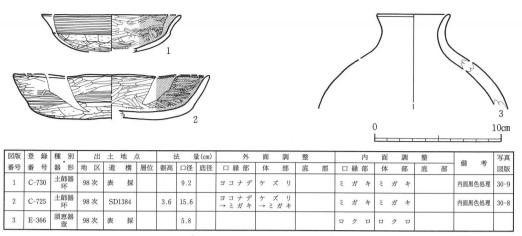
第11図 SA1392柱穴断面図

いことや検出時の上面の平面形、さらに底面の形状の違いから柱穴とは別の遺構と判断した。 SI1391 に切られている。



第12図 S I 1391竪穴住居跡平・断面図

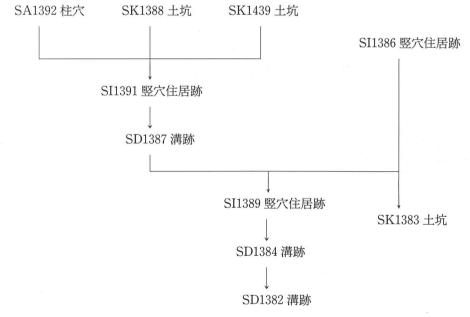




第15図 第98次調査出土遺物

3. ま と め

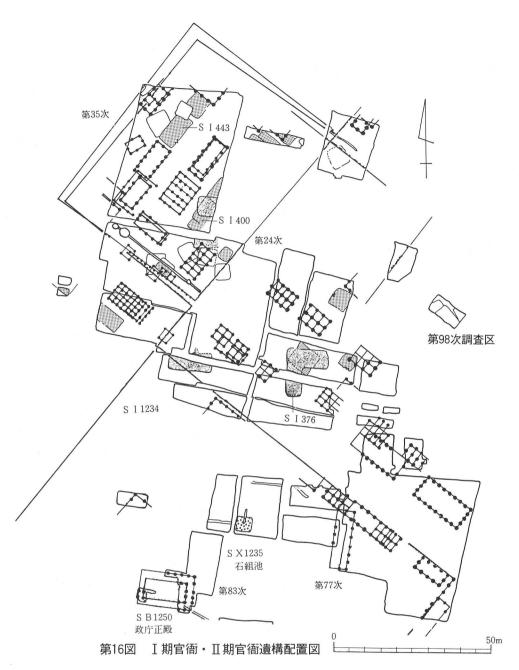
発見された遺構は、竪穴住居跡 3 軒、土坑 3 基、溝跡 3 条、柱穴 1 、ピットなどである。遺 構の重複関係を見ると以下のようになる。



これらの遺構のうち出土遺物から年代の検討が可能なのは SI1386、SI1389 竪穴住居跡である。SI1386 竪穴住居跡の遺物のうち床面上から出土したのは土師器 C-731 高坏のみで、坏部がほとんど残存していない。東北地方南部における古墳時代後半の土師器高坏と比較すると、短い円筒状の脚部であり著しく異なった器形をしている。他地域からの搬入や須恵器の模倣の可能性もあるが、現時点では器形全体の様相が不明なことや出土例が他にないことから類例を待って検討していきたい。なおこの住居跡の掘り方やカマドのソデの構築土中から第7図に示し

たような土器が出土している。それらは住居跡の年代を直接示すものではないが、その中の須 恵器 E-365 高坏は坏部の中ほどが 2 条の沈線で区画され、その中に流麗な波状沈線が施されて いる。脚部は残存していないが長脚で透かし穴が入るものと推定される。年代については陶邑 古窯跡群のなかの高蔵43号窯跡出土の高坏や猿投窯跡の東山44号窯跡出土の高坏に類似する ものがある。このような土器がいかなる状況下で住居構築時に入ったのか、この時期の遺構の 存在を含めて注目される。これらの他に年代の検討可能な遺物がないことから SI1386 竪穴住 居跡の年代について、現時点では明らかにするのは難しいと考えられる。SI1389 竪穴住居跡に ついては床面上から須恵器 E-364 皿、土師器 C-724 坏が出土している。 須恵器 E-364 皿と類似 したものは第82次調査区の攪乱により削平された層の上面から出土した須恵器 E-295 皿があ る (註1)。年代については陶邑古窯跡群との比較から8世紀の前葉の年代が与えられている。 比較すると口径や調整技法はよく似ているが、口縁端部の形状や器高にやや違いが認められる。 陶邑古窯跡群のなかでも前述の年代より古い高蔵217号窯跡のなかにも類似するものがある が、量的にはきわめて少ないという(註2)。よってここでは7世紀代に遡る可能性もあるが第 82 次調査区で出土した皿と同様の年代と見ておきたい。土師器 C-724 坏はケズリ調整が明瞭で 赤褐色を呈し、東北地方の土師器の中には見うけられないものである。類似のものは第35次調 査区の SK468 土坑からも出土している。今回出土した土師器 C-724 坏は、II 期官衙外郭大溝で ある SD35 溝跡から出土した関東系土師器としたものと調整や色調の点できわめて類似するも のである(註3)。関東地方においてこれらの土器が共伴して出土している遺跡もあり(註4)、 その範疇に含めてよいものと考える。したがってここでは土器の年代についてはこれまでのII 期官衙外郭大溝出土土器の年代観から7世紀の後半から8世紀の初頭頃のものと見ておきた 170

遺構については調査区が狭小で全容が把握できるものは少ない。その中で SI1389 竪穴住居跡は東西が 7 m を超えるものであり、本遺跡内にあっては官衙内に配置された長屋状の竪穴住居跡 (註 5) と規模の点で類似している。ただしこれらの遺構は I 期官衙や II 期官と同方向で建てられており、主柱穴なども発見されていない。SI1389 竪穴住居跡の方向は $E-43^\circ-S$ で、I 期官衙の方向性に近い角度の振れを示している。しかし I 期官衙の中でも第 98 次調査区周辺の建物跡や材木列は真北あるいは真東西方向から $23^\circ\sim34^\circ$ の振れの範囲に収まっており(註6)、I 期官衙に含められるかどうか疑問な点もある。遺構の方向性だけで考えるならむしろ I 期官衙以前の竪穴住居跡に振れの近いものがある。しかし遺構の重複関係(SA1392 → SI1391 → SI1389)から見ると、SI1391 竪穴住居跡の掘り方底面で検出された SA1392 柱穴が I 期官衙以前の遺構とは今のところ考えにくく、SI1391、SI1389 竪穴住居跡については I 期官衙かそれ以降の時期と見るべきであろう。遺物の検討の結果からも重複関係の新しいSI1389竪穴住居



跡の出土遺物はII期官衙外郭大溝出土の土器の年代観などから7世紀の後半から8世紀の前葉の年代としておいた。それを踏まえればSI1389竪穴住居跡はII期官衙に属する遺構と考えられる。ただしこれまでの調査ではII期官衙の遺構は真北方向に規制されており、それらとは方向性に違いがある。この点についてはII期官衙の政庁正殿や石組池より北方において遺構数が減少することと合わせて、II期官衙内の遺構のあり方を明らかにする上での課題として今後慎重に検討していきたい。

IV 第 99 次発掘調查

1. 調 査 経 過

第99次調査区は、方四町II期官衙の外 郭大溝南西隅から西へ140 m 程離れた 地区に位置している。II期官衙より西部 の調査は、昭和57年に行われた第27次 調査のみである。そこではピット中から 円面硯が出土し、この周辺にも官衙の遺 構が拡がっていると考えられた。しかし 小規模な調査にとどまっており、遺跡内 での遺構の様相を把握するまでには至ら なかった。なお昨年度行われた第96次調 査では、I期官衙の南辺と考えられる SA272 及び SA1380 材木列が検出され ている。さらにII期官衙の遺構としては、 東西方向の3本の材木列が検出されてい る。第99次調査は、これらの遺構が官衙 の南西域においてどのように拡がるもの かを明らかにする目的で実施した。



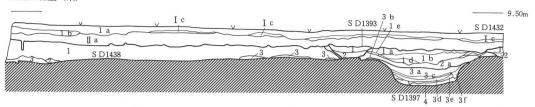
この周辺は都市化が著しい地域であり、発掘調査を実施できる地点が極めて少なくなっている。第 99 次調査区の調査面積は約 350 m^2 と狭小であるが、この周辺では発掘調査を実施できる数少ない適地である。

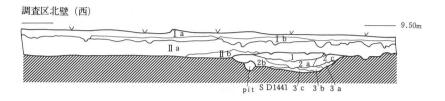
現況は標高9m程の畑地で、9月1日より土層を観察するため小規模なトレンチによる調査を開始し、調査区設定の後、重機による表土排除を行った。耕作土の厚さは0.65~0.75m程でその下が遺構検出面となっていた。なお、遺構の状況等により必要に応じて調査区の一部を拡張した。調査が進み、遺構の内容が明らかとなった11月25日に報道発表、27日に現地説明会を実施した。すべての作業を終了したのは12月13日である。

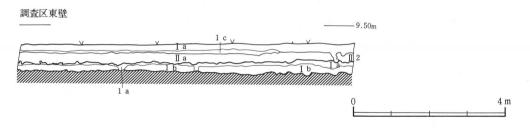
2. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列1条、材木列抜き取り溝1条、溝跡9条、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡1軒、土坑1基、小柱穴・ピットなどである。これらの遺構のうち、SA1430材木列及びSD1397溝跡以外のものについては、耕作土(Ia層~IIb層)直下の基本層位III

調査区北壁 (東)







層位	土 色	土 質	備考
基本層位			710
Ιa	10 YR3/3 暗褐	シルト	
Ιb	10 YR3/4 暗褐	シルト	炭化物と焼土を含む
Ιc	10 YR4/3 にぶい黄褐	シルト	
II a	10 YR4/4 褐	シルト	にぶい黄褐シルトと暗褐粘土質シルトをブロック状に含む
II b	10 YR4/4 褐	粘土質シルト	炭化物、酸化物、焼土を少量含む
SD1393			
1	10 YR4/3 にぶい黄褐	シルト	酸化鉄、マンガン粒を多く含む
2	10 YR5/3 にぶい黄褐	砂質シルト	酸化鉄を含む
SD1397			
1 a	10 YR4/3 にぶい黄褐	シルト	マンガン粒と酸化鉄を多量に含む
1 b	10 YR4/2 灰黄褐	シルト質粘土	マンガン粒と酸化鉄を多量に含む
1 c	10 YR4/3 にぶい黄褐	シルト	酸化鉄を多くマンガン粒を少量含む
1 d	10 YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	酸化鉄を多くマンガン粒を多く含む
1 e	10 YR5/2 灰黄褐	シルト	(火山灰?)を一部に含み酸化鉄を少量含む
SD1432			
1	10 YR4/4 褐	シルト	
2	10 YR3/3 暗褐	粘土	
SD1441			
1	10 YR4/4 褐	シルト	マンガン粒と酸化鉄を含む
2 a	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	
2 b	10 YR4/4 褐	シルト	酸化鉄マンガン粒を含み少量の炭化物を含む
2 c	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	マンガン粒を多く含む
3 a	10 YR4/4 褐	粘土質シルト	にぶい黄橙シルトをまだらに含む
3 b	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	灰黄褐粘土をブロック状に含む
3 C	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	暗褐粘土質シルトをブロック状に含む
SD1438			
1	10 YR4/3 にぶい黄褐	シルト	酸化鉄、マンガン粒を多く含む
2	10 YR4/3 にぶい黄褐	シルト	にぶい黄橙シルトを粒状に含む
3	10 YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	

第18図 第99次調査区断面図

層上面で検出されている。

SAI430 材木列 南北に延びる材木列で、方向はN-33°-Eである。幅 60~74 cm の布掘り 状の痕跡を、長さ 14 m にわたり検出した。布掘り底面まで完全に抜き取られている箇所もあ る。抜き取りの深度が浅い部分では、直径 18~26 cm の柱痕跡が確認された。断面観察では、 材木列掘り方は、遺構検出面より 86 cm ほど掘り込まれている。壁面は、底面に対してほぼ垂 直に立ち上がっている。埋土は灰黄褐色粘土質シルト・粘土、にぶい黄橙色粘土などで、遺構 層理面には、酸化鉄が帯状に含まれている。

材木列掘り方埋土底面から内面に漆が付着した土師器 C-740 壺の底部のほか、須恵器甕の口縁部片が1点、土師器甕の底部が3個体分出土している。

SD1394 · SD1429 溝跡を切り、SA1430 材木列抜き取り溝によって切られている。

SA1430 材木列抜き取り溝 SA1430 材木列の掘り方と同方向に、一部広がったり蛇行したりしながら調査区外に延びている。検出した中央部から北部にかけては抜き取りの深度が深く一部では、材木列布掘り底面にまで及んでいる。抜き取り溝は上幅 2.28 m、断面 V 字形である。西壁の立ち上がりが緩やかでやや乱れていることから、西側から抜き取られた可能性がある。埋土は灰黄褐色の粘土質シルトを主体とするが、灰黄褐色粘土の小ブロック・黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。

遺物は、内外面黒色処理された土師器 C-753 坏 (第 20 図 1)・C-736 坏 (第 20 図 2)・C-734 壺 (第 20 図 3)・C-752 坏 (第 20 図 4)・C-735 坏 (第 20 図 5)・C-743 坏 (第 20 図 6)・C-737 坏 (第 20 図 7)・C-738 坏 (第 20 図 8)・C-745 坏 (第 20 図 9)・C-751 坏 (第 20 図 10)・C-755 坏 (第 20 図 11)・C-744 坏 (第 20 図 12)・C-748 坏 (第 22 図 1)・C-746 甕 (第 22 図 2)、

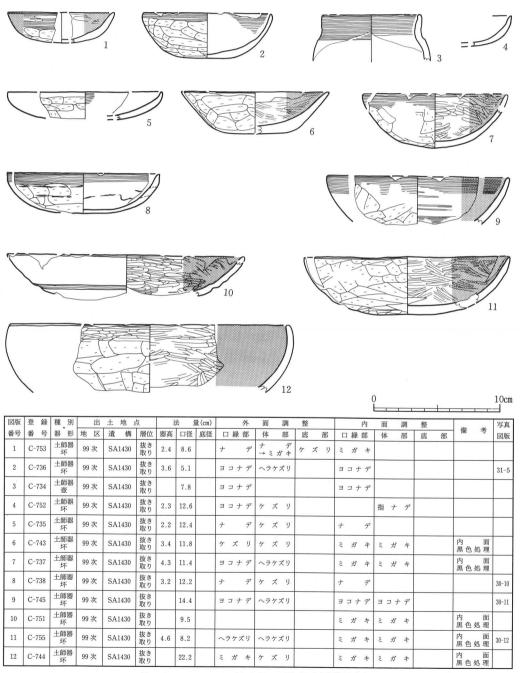


第19図 SA1430抜き取り溝・SA1430材木列・SD1394・SD1429溝跡断面図

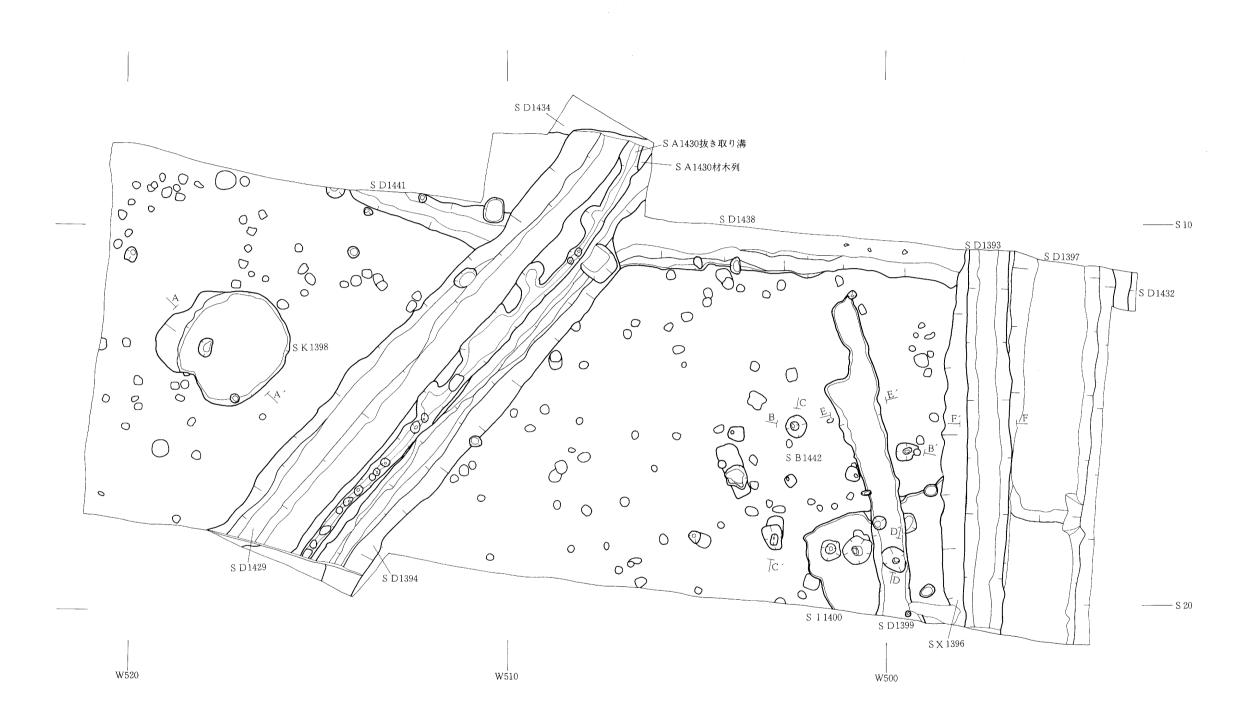
外面平行叩き目・体部内面に同心円文当て具痕が明瞭な須恵器 E-370 甕(第 22 図 5)・体部が 扁平な球形で沈線で区画された中に列点刺突文が連続して施された須恵器 E-371 腿(第 22 図 3)また土製品 P-27 紡錘車(第 22 図 4)が出土している。

SD1429 · SD1394 溝跡、SA1430 材木列を切っている。

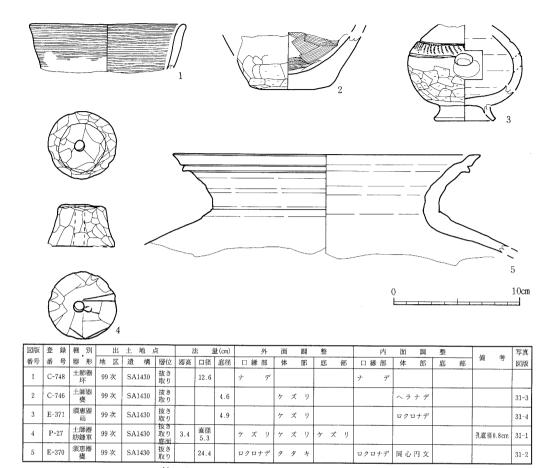
SDI394 溝跡 南北に延びる溝跡で、西辺でN-35°-E方向に14 m を検出している。上幅



第20図 SA1430抜き取り溝出土遺物(1)



第21図 第99次調査区遺構配置図 (1/100)



第22図 SA1430抜き取り溝出土遺物(2)

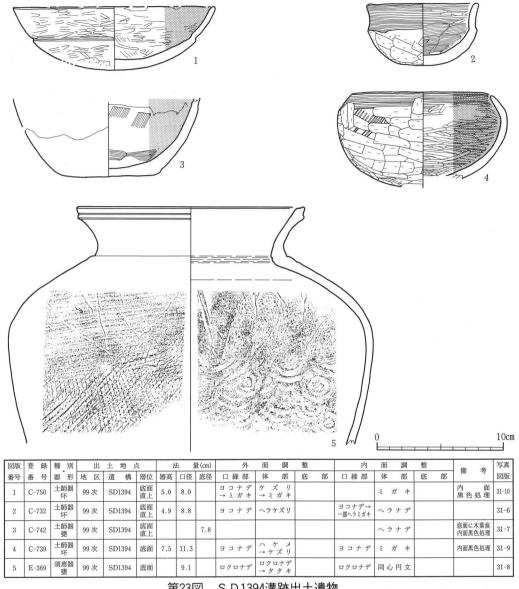
 $3.20\sim3.78\,\mathrm{m}$ を計る。底面は一部検出したのみであるが、幅 $1.40\,\mathrm{m}$ 程になると推定される。断面観察では、深さ $88\,\mathrm{cm}$ ほどの逆台形の溝跡である。壁面は直立気味に立ち上がり、検出面より $50\,\mathrm{cm}$ ほどのところから緩やかに開きはじめる。堆積土は、にぶい黄橙色・灰黄褐色のシルト質粘土及び粘土質シルトである。

遺物は、土師器 C-750 坏(第 23 図 1)・C-732 坏(第 23 図 2)・C-739 坏(第 23 図 3)・C-742 甕(第 23 図 4)が底面直上層から出土している。須恵器 E-369 甕は、体部が SD1394 溝跡 底面から、口縁部が SA1430 材木列抜き取り溝から出土し接合した。

SA1430 材木列および抜き取り溝に切られ、SD1429 溝跡を切っている。

SD1429 溝跡 SD1394 溝跡と同方向に延びる溝跡である。南半部でのみ、溝の底面と壁面の一部が残存している。調査区南端より北へ 10 m まで検出した。北部は完全に SD1394 と重複しており検出されない。上幅 2.90 m 以上、底面幅 $2.50\sim2.80 \text{ m}$ 、深さ $50\sim70 \text{ cm}$ の逆台形の溝跡と考えられる。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトなどである。遺物は出土していない。

SD1394 溝跡・SA1430 材木列及び抜き取り溝に切られている。



第23図 S D1394溝跡出土遺物

SD1434 溝跡 調査区の北端部に、東西方向に延びる溝跡を 2.60 m にわたり検出した。方向 はW-3°-Sである。堆積土は褐色シルト、にぶい黄褐色シルトなどである。

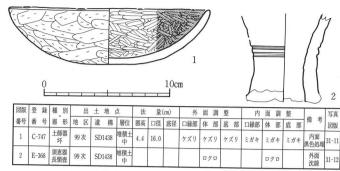
SD1394 溝跡・SA1430 材木列抜き取り溝を切っている。

SDI438 溝跡 調査区の北壁際で、東西に延びる溝跡を 9.1 m にわたり検出した。南辺での 方向は $\mathrm{E}-4^{\circ}-\mathrm{N}$ である。 上幅は $1.20\,\mathrm{m}$ 以上、深さ $30\,\mathrm{cm}$ ほどで底面には凹凸がある。 断面観 察では、壁面はやや外傾しながら立ち上がる U 字形の溝跡である。 堆積土はにぶい黄褐色シル トを主体とする。

堆積土中より土師器 C-747 坏 (第24図1)のほか、土師器甕片、須恵器長頸壺頸部片 E-368

(第24図2) などが出土して いる。

SD1394 溝跡と SA1430 材 木列抜き取り溝の堆積土の一 部を切っている。東側で検出 された SD1393 溝跡、SX1396 性格不明遺構に切られてい る。



第24図 S D1438溝跡出土遺物

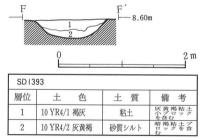
SDI44I 溝跡 上幅 0.8~1.18 m、底面幅 40 cm、深さ 30 cm 程の溝を 3.6 m にわたり検出し た。方向は南辺で $E-13^{\circ}-S$ である。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は、 褐色シルト•にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。SD1394 溝跡及び SD1438 溝跡とは、規模 や方向、底面の様相から同一の遺構ではないと考えられた。遺物は出土していない。

SDI393 溝跡 上幅 $1.0\sim1.2$ m、底面幅 $40\sim50$ cm、深さ 30 cm で、断面形は U 字形である。 検出した南端から $N-6^\circ$ -W方向に $9.8 \, m$ 続き、さらに調 査区外に延びる。底面にはやや凹凸がある。堆積土は2層 に分けられ、第1層は褐灰色粘土、第2層は灰黄褐色砂質 シルトで灰白色火山灰と考えられる。堆積土中より土師器

片がわずかに出土した。

SX1396 性格不明遺構を切っている。

SDI399 溝跡 上幅 0.64~1.44 m、底面幅 0.40~1.26

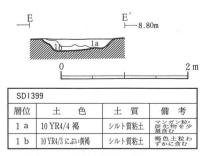


第25図 S D1393溝跡断面図

m、深さ $10\sim20~cm$ で、 $N-17^{\circ}-W$ 方向にわずかに孤を描きながら延びる溝である。調査区南 端から8.4m続き途切れている。堆積土は、褐色及びにぶい黄褐色のシルト質粘土である。

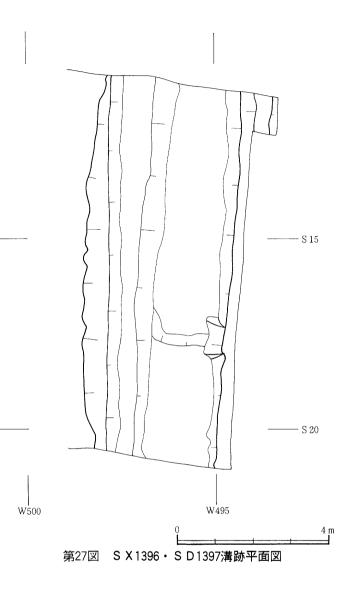
遺物は土師器坏片がわずか、須恵器片が1点のみ出土し た。

SI1400 竪穴住居跡、SB1442 掘立柱建物跡を切っている。 SD1432 溝跡 調査区の東北端部で長さ 0.96 m を検出 したのみである。方向はN-4°-Wほどになるものと推定 される。堆積土は褐色シルト、暗褐色粘土である。SX1396 を切っており、東側に向かって緩やかに落ち込んでいく。 遺物は出土していない。



第26図 S D1399溝跡断面図

SDI397 溝跡 SX1396 性格不明遺構の堆積土除去後に検出された溝跡である。検出面での 上幅 $2.20\sim2.50$ m、底面幅 $1.20\sim1.80$ m、深さ $40\sim50$ cm で断面形は逆台形である。西辺で N-4°-W方向に10m程続 き、調査区外にさらに延びて いる。壁面は底面に対してわ ずかに外傾しながら立ち上が り、徐々に緩やかに開いてい く。底面は平坦であるが、検 出した南端から3mのとこ ろで5cmほどの緩やかな段 差がつく。段差付近の東壁面 には、溝の内側に向かってわ ずかに張り出した部分があ る。堆積土は灰黄褐色粘土を 主体とし、下層では黒褐色粘 土をしま状に含んでいる。自 然木の枝などの植物遺体、ク ルミなどの種子が含まれてい る。遺物は須恵器甕体部片、 土師器甕・坏片・銅製品の破 片のほか、凸面の叩き目痕は 明瞭でないが、側縁面取り・ 凹面布目痕の平瓦片が1点、 性格不明の石製品 K-26 など が出土している。

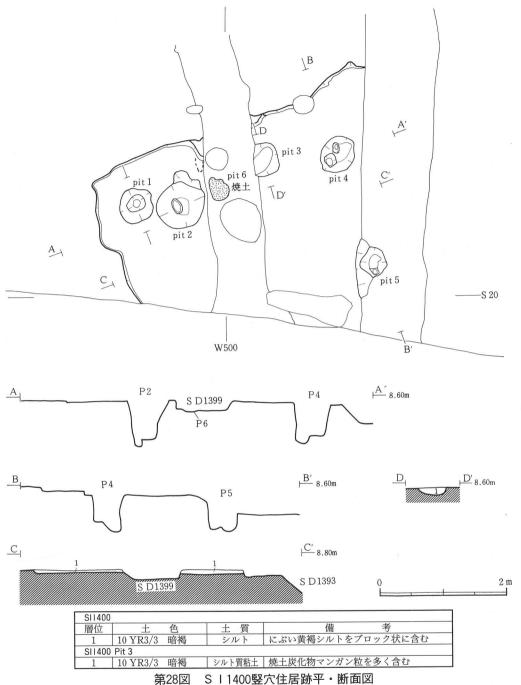


SXI396 上幅 4.3 m 以上で、調査区の東端で南北方向に縦断している。遺構の西壁の立ち上がりが非常に乱れ、一定していない。深さは約50 cm 程である。堆積土は、にぶい黄褐色シルト・灰黄褐色粘土質シルト・黄褐色粘土などである。

遺物は、土師器片・甕体部片、須恵器甕片のほか、凸面縄叩き・側縁面取り・凹面布目痕のある平瓦片が1点、また昆虫遺体やクルミなどの種子が出土している。

SD1397 · SD1438 溝跡を切り、SD1393 溝跡及び SD1432 溝跡に切られている。

SII400 竪穴住居跡 東西長 $4.6 \,\mathrm{m}$ 以上、南北長 $2 \,\mathrm{m}$ 以上で、西辺での方向は $N-29^\circ-W$ である。削平が床面まで及んでおり、検出面から床面まで $3\sim5 \,\mathrm{cm}$ 程である。カマドは北辺に付設されているが、SD1399 溝跡に切られており、ソデの痕跡を残すのみである。カマド前面には、

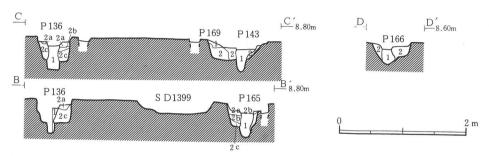


焼土・炭化物が分布している。主柱穴は Pit 2・Pit 4・Pit 5 で、掘り方は直径が 52~72 cm で ある。しかし柱痕跡が検出されなかったため抜き取られている可能性がある。周溝は検出され なかった。堆積土は暗褐色シルト及び粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどである。なお この住居跡は、床面までの精査にとどめている。

床面上からハケメ調整が明瞭で、口縁部がくの字状に外反する土師器甕の破片、土師器坏片のほか、甕底部が1点出土した。SD1399溝跡・SB1442掘立柱建物跡に切られている。

SBI442 掘立柱建物跡 東西1間以上、総長 $3.32 \,\mathrm{m}$ (柱間寸法 $310 \,\mathrm{cm} \sim 332 \,\mathrm{cm}$)、南北1間以上、総長 $2.96 \,\mathrm{m}$ (柱間寸法 $286 \sim 296 \,\mathrm{cm}$)で、方向は西柱列でN -3° -E、北柱列でW -4° -Nである。柱穴は $50 \,\mathrm{cm}$ 程の隅丸方形で、抜き取りを受けている。柱の深さは $50 \,\mathrm{cm}$ 、掘り方の深さは $40 \,\mathrm{cm}$ ほどである。埋土は、暗褐色及びにぶい黄褐色の粘土質シルトなどである。柱穴掘り方から遺物は出土していない。

SI1400 竪穴住居跡を切り、SD1399 溝跡に切られている。



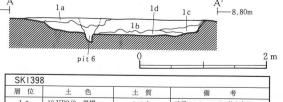
P136				P169			
層位	土 色	土 質	備考	層位	土 色	土 質	備考
1	10 YR3/3 暗褐	粘土質シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む	2	10 YR3/4 暗褐	粘土質シルト	焼土と炭化物マンガン粒含む
2 a	10 YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰黄褐粘土プロック酸化鉄を含む	P165			
2 b	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	マンガン粒酸化鉄を含む	1	10 YR3/4 暗褐	粘土質シルト	マンガン粒、焼土、炭化物を含む
2 C	10 YR4/4 褐	粘土質シルト	灰黄褐土ブロック、マンガン粒含む	2 a	10 YR3/4 暗褐	シルト質粘土	焼土、炭化物を少量含む
P143				2 b	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	灰黄褐土、マンガン粒含む
1	10 YR3/4 暗褐	粘土質シルト	マンガン粒焼土、炭化物を少量含む	2 c	10 YR4/4 褐	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
2 10 YR4/4 褐 粘土質シルト にぶい黄褐土含む							
P169				1	10 YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	焼土、炭化物を含む
1	10 YR5/4 にぶい黄褐	シルト質粘土	褐色粘土質シルトを含む	2	10 YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	にぶい黄褐土、マンガン粒含む

第29図 SB1442掘立柱建物跡断面図

SKI398 土坑 長軸 2.8 m、短軸 2.6 m の楕円形で、深さ 26 cm 程の土坑である。上部削平により確認プランが乱れている。壁面はやや外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。 堆積土は、黒褐色シルト・暗褐色粘土質シルトなどである。底面で検出したピットもあるが、この土坑に伴うものかは判然としない。 A

遺物は、堆積土中から在地産の須恵器壺口縁部片が1点、他に土師器甕体部片などがわずかに出土したのみである。

Pit 6 は土坑を切っているが、斜めに掘り 込まれているため、断面では途中から検出 している。



SK139	8		
層位	土 色	土 質	備考
1 a	10 YR2/3 黒褐	シルト	暗褐シルトマンガン粒を含む
1 b	10 YR3/4 暗褐	粘土質シルト	黒褐粘土質シルト、マンガン粒を含む
1 c	10 YR3/3 暗褐	粘土質シルト	黒褐粘土、マンガン粒を含む
1 d	10 YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	にぶい黄褐シルト、マンガン粒 を含む

第30図 S K 1398土坑断面図

3. ま と め

発見された遺構は、材木列1条、材木列抜き取り溝1条、溝跡8条、掘立柱建物跡1棟、竪 穴住居跡1軒、土坑1基、ピット170個などである。重複関係の不明な遺構を除き、整理すれ ば次のとおりである。



(1) 官衙造営前の遺構……SII400 竪穴住居跡

SI1400 竪穴住居跡は、方向がN-29°-Wと西に偏しており、官衙と同時期に並立する遺構とは考えにくい。復元できる遺物は出土していないが、床面上から口縁部がくの字状に外反し体部にハケメ調整が明瞭な土師器甕の破片が出土している。同様の甕は東北地方南部の土師器編年で古墳時代後期の標式遺跡となっている栗遺跡第12号住居跡などに類例を見ることができる(註7)。従って出土した遺物は少ないが、本住居跡は7世紀前半頃のものとみておきたい。

(2) I期官衙の遺構……SDI429 溝跡・SDI394 溝跡・SAI430 材木列・

SA1430 材木列抜き取り溝

SD1429 溝跡・SD1394 溝跡については、SA1430 材木列と同方向・同位置にあることから I 期官衙に属する遺構と考えられる。したがって I 期官衙造営初期の段階では、西辺は 2 時期の重複をもつ溝によって区画され、その後に材木列が構築されたものとみられる。新しい方のSD1394 溝跡から出土した土師器 C-732 坏は、内面が黒色処理されずナデ調整のもので、本遺跡の第 48 次調査で検出した SI600 竪穴住居跡床面から出土した土師器 C-552 坏に類似してい

る。SI600 住居跡は、I 期官衙かその前段階の遺構と考えられているものである。本遺跡周辺で類例を求めれば、栗遺跡第 17 号住居跡床面出土の土師器坏に類似するものがあり、7 世紀代には存在していると考えられる(註 8)。ところで SD1394 溝跡は官衙の区画溝と考えられるものであり、本遺跡の官衙跡は今のところ 7 世紀前半に遡るとは考えにくいことから、ここでは 7 世紀後半に属するものとみておきたい。また、土師器 C-739 は体部が扁平の球形を呈し、口縁部径が体部最大径よりも小さく内側に湾曲するものである。外面は一部ハケメ調整後ヘラケズリされ、内面が丁寧に磨かれている。形態的には須恵器の鉄鉢と類似しておりその模倣の可能性もある。器形的には藤原宮跡で、宮造営前の遺構から出土した須恵器のなかに類例を見い出すこともでき、藤原宮造営前の 7 世紀後半代のものと考えられる(註 9)。土師器 C-750 坏は、底部から口縁部まで緩やかに内弯し、体部中位よりやや上に段を持ち、内面に軽い稜がつくものである。これは第 4 次調査の SD35 溝跡 1 層出土の土師器坏類と比較すると、やや器高が高く丸底である点や段の巡る位置が高いことなどに古い要素が認められ、SD1394 溝跡の年代は 7 世紀後半代に位置付けるのが妥当と考えられる。

SA1430 材木列抜き取り溝出土遺物については、内面黒色処理された土師器とナデ調整された土師器に大別される。土師器 C-755 坏は平底に近く、体部に段や稜を有さず口縁部まで緩やかに立ち上がるものである。これらを材木列より古い SD1394 溝跡から出土した土師器類と比較するとやや年代の新しくなる要素が指摘できよう。また須恵器 E-371 聴は、ほぼ球形の体部の上半部に2本の沈線が巡り、その中に刺突が連続して施されている。体部のほぼ中位に円孔があけられている。体部下半は手持ちヘラケズリ調整され、底部には高台が付いている。類例は少ないが、沈線の巡る位置や刺突文などに古い要素を見い出すことができ、第96次調査出土の平瓶などともに7世紀後半代に位置付けられる遺物であろう。なお注口部の形態にやや違いはあるが7世紀代の横穴古墳とされる宮城県亘理町袖ヶ沢北横穴墓(註10)から類似のものが出土している。

(3) I 期官衙以降の遺構群……SDI438 溝跡・SDI432 溝跡・SDI393 溝跡・

SX1396

SD1438 溝跡から出土した土師器 C-747 坏は、平底で体部に段や稜を持たず体部から口縁部 にかけて緩やかに立ち上がるもので、東北地方の土師器編年の国分寺下層式期に含まれるもの とみられるが、ほかに年代決定可能な遺物を出土していないので遺構の時期については概ね8世紀代としておきたい。

その他の遺構で検討が可能な遺物を出土したものはなく、遺構の時期は明らかでないが、出土した土師器の破片のなかにロクロ使用のものが含まれないことからいずれも8世紀までの遺構とみておきたい。

V 第 100 次調査

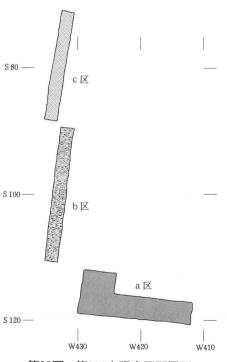
1. 調 查 経 過

第 100 次調査は方四町II期官衙の南西コーナーより南西へ 130 m ほど離れた地点である。平成 4 年度に実施した第 96 次調査区の北に隣接した箇所である。第 96 次調査では官衙造営以前の溝跡 2 条、I 期官衙の材木列 2 条(SA272・SA1380)、II 期官衙の材木列 3 条(SA1365・SA1378・SA1379)掘立柱建物跡 5 練などを発見した。とくに I 期官衙の材木列についてはこれまでの周辺の調査から南端を区画していると考えられた。さらに SA1380 は調査区内で北に曲がっているが、SA272 は調査区内を $E-27^\circ-S$ 方向で横断しさらに西北方へ延びていた。今年度は SA272 がどのように西に延びるのか、あるいは北に曲がるのかを明らかにするために第 100 次調査を実施した。

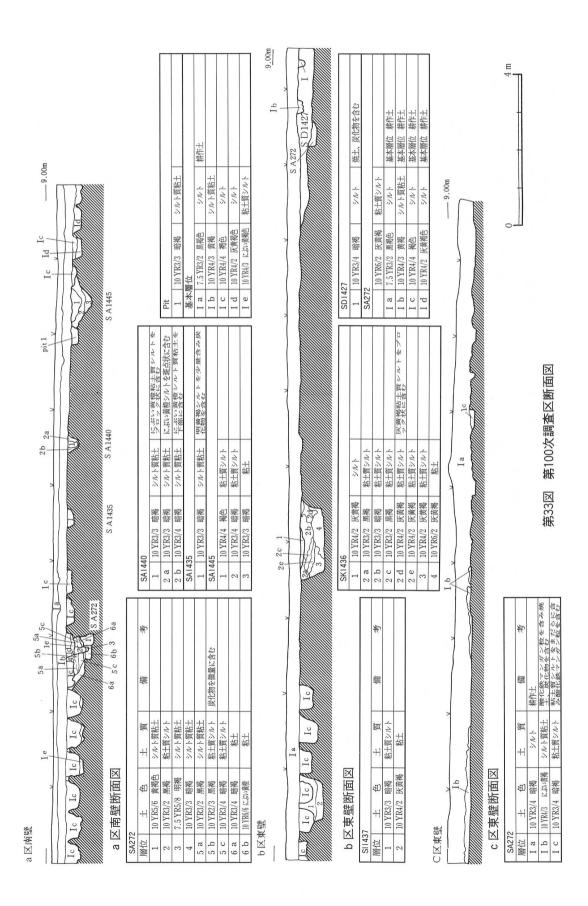
現況は標高 8.8 m~9 mの畑地である。10月12日から試掘調査に入り、敷地内に a、b、c 区を設定(300 m²) し表土排除を実施した。その後遺構の検出作業に入ったが、 a 区の西半は畑の耕作による天地返しを深くうけ、遺構が著しく削平されていた。したがって予定した排土の量より多く、排土場の確保が困難なため a 区の調査区を縮小して調査を実施した。そのため調査面積は 180 m²となった。調査区の遺構の全容が把握されたのは 11月の中旬であった。なお c 区については S100直接官衙にかかわる遺構が検出されなかったため、遺構を確認したにとどめた。第 99 次調査と合わせた成果を 11月25日に報道発表し、27日現地説明会を実施した。その後平面図等の作成をし、埋め戻しが終了したのは 12月17日であった。



第31図 第100次調査区位置図



第32図 第100次調査区配置図



2. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列4条、掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、土坑1基、井戸跡2基、竪穴遺構1基、ピットなどである。これらの遺構は耕作土(Ia~e層)直下で検出されているが、遺構の検出される上面の凹凸が著しく遺構の残存状況は良くない。

SA272 材木列 東西に延びる材木列で、方向は $E-29^\circ-S$ である。検出した長さは a、b 区を合わせ $21.5\,\mathrm{m}$ で、布掘りの上幅が $30{\sim}65\,\mathrm{cm}$ 、深さは残存状況の良好な箇所で検出面より $70\,\mathrm{cm}$ である。布掘り底面に標高差があり、底面の浅い箇所では攪乱(畑の天地返し)により途切れている。布掘りの南壁際に直径 $8{\sim}17\,\mathrm{cm}$ の柱痕跡が見られる。a 区の南壁近くでは幅 $3\,\mathrm{cm}$ 、長さ $12\,\mathrm{cm}$ の板状の痕跡も見られる。a 区の中で布掘り底面まで掘り下げたところ、小柱穴が並んで検出された(図版 23)。柱痕跡が上部で検出された位置と変わらないことや小柱穴の掘り方が布掘りの南壁と完全に重複していることから、材木列の構築手順を示すものと考えられる。埋土は黒褐色シルト質粘土、暗褐色粘土などである。

遺物は埋土中から土師器と須恵器の小片が少量出土している。

SB1433 掘立柱建物跡、SA1435・SA1440・SA1445 材木列、SD1427 溝跡に切られている。

SAI435 材木列 南北に延びる材木列で、方向は真北方向である。検出した長さは $1.2 \,\mathrm{m}$ 程で、北半が攪乱により削平されている。布掘りの上幅は $40{\sim}60 \,\mathrm{cm}$ 、深さは検出面より $18 \,\mathrm{cm}$ である。布掘りのほぼ中央に直径 $10{\sim}15 \,\mathrm{cm}$ の柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。

SA272 材木列を切っていると推定される。

SAI440 材木列 南北に延びる材木列で、方向は $N-2^\circ-W$ 方向である。検出した長さは 3.5 m 程で、北半が攪乱により一部削平されている。布掘りの上幅は $25\sim40$ cm、深さは検出面より 28 cm である。布掘りのほぼ中央に直径 $10\sim15$ cm の柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。

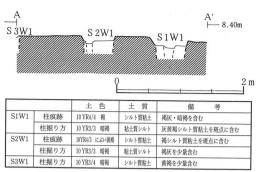
SA272 材木列を切っている。

SAI445 材木列 南北に延びる材木列で、方向はほぼ真北方向である。検出した長さは $14 \,\mathrm{m}$ 程で、北半が攪乱により一部削平されている。上方より溝状の抜き取りがなされ、調査区の南半では材木列の布掘り底面まで及んでいる。北部で残存する布掘りの上幅は $30\sim50 \,\mathrm{cm}$ 、深さは検出面より $3\sim6 \,\mathrm{cm}$ である。布掘りの中に直径 $10\sim12 \,\mathrm{cm}$ の柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色粘土などである。

遺物は土師器甕片、須恵器大甕片の他に、内面が黒色処理されない関東系の土師器坏片が1 点が出土している。

SA272 材木列を切っている。

SB1433 建物跡 東西 2 間、総長 4.1 m(柱間 寸法 205 cm)、南北 2 間以上、総長 2.5 m 以上 (柱間寸法 130 cm) の南北棟の建物跡と推定され、方向は西柱列で $N-3^\circ-E$ である。柱穴は $20\sim45\times50\sim63 \text{ cm}$ の隅丸方形で、柱痕跡は直径が $13\sim20 \text{ cm}$ である。南東隅の柱穴がきわめて小規模である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルト、シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。



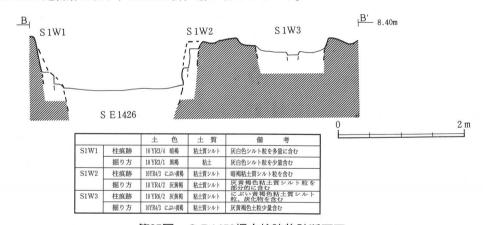
第34図 SB1433掘立柱建物跡断面図

SA272 材木列を切り、SB1450 建物跡、SE1426 井戸跡に切られている。

SBI450 建物跡 東西 2 間以上、総長 2.7 m以上(柱間寸法 $180\sim190$ cm)、南北 1 間以上、総長 2.2 m以上(柱間寸法 220 cm)の東西棟の建物跡と推定され、方向は南柱列で $E-2^\circ-N$ である。柱穴は $75\sim85\times100\sim115$ cm の隅丸長方形で、柱痕跡は直径が 22 cm である。柱穴の埋土は黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は南1西1柱穴より土師器片が1点出土しているのみである。

SB1433 建物跡を切り、SE1426 井戸跡に切られている。



第35図 SB1450掘立柱建物跡断面図

SE1426 井戸跡 直径 300 cm の円形で、深さは 90 cm 以上である。埋土は灰黄褐色粘土で、こぶし大の河原石が多量に含まれている。

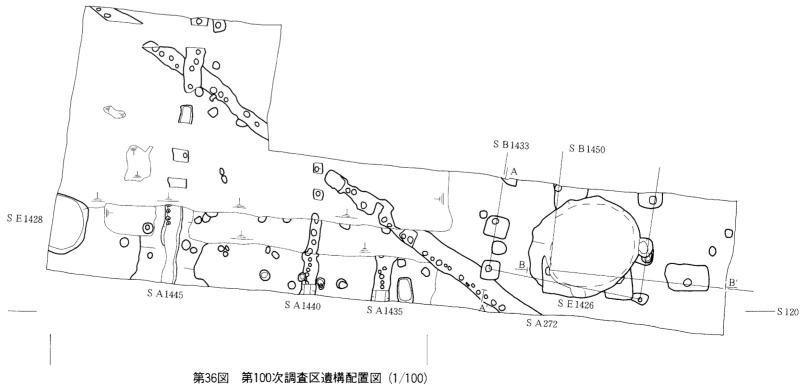
遺物は陶器、磁器、瓦、明治年間の銅貨などが出土している。

SB1433、SB1450 建物跡を切っている。

SE1428 井戸跡 直径 150 cm の円形で、深さは 85 cm 以上である。埋土は灰白色粘土、灰黄褐色砂などで、遺物は出土しなかった。a 区の東端で遺構の一部を検出したにすぎない。

SDI427 溝跡 総長 19 m 以上で南北に延びる溝跡である。上幅 100~160 cm、下幅 20~60





cm、深さ $38\sim70$ cm、底面は凹凸があり、断面形は逆台形で壁は直線的に広がりながら立ち上がっている。方向は $N-5^\circ-W$ で、b 区南端で西に蛇行している。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色粘土質シルトなどである。

遺物は土師器、須恵器、陶器片が出土している。

SD1431 溝跡、SK1436 土坑、SI1437 竪穴遺構に切られている。

SDI43I 溝跡 上幅 $70\sim90$ cm、下幅 $50\sim70$ cm、深さ $6\sim11$ cm、断面形は U 字形で壁はやや直立気味に立ち上がる。方向は $E-6^\circ-N$ である。堆積土は褐色粘土質シルトである。

遺物は土師器、須恵器片が少量出土している。

SK1436 土坑を切り、SD1427 溝跡に切られている。

SKI436 土坑 南北 200 cm、東西 170 cm 以上の方形の土坑と推定され、深さは 60 cm である。底面は平坦で、壁は南側が孤状に反り気味に立ち上がり、北側が直線的に立ち上がってい

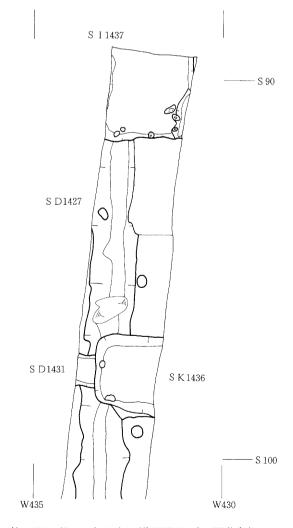
る。堆積土は黒褐色、灰黄 褐色粘土質シルトなどで、 遺物は出土しなかった。

SD1427 溝跡、SD1431 溝 跡に切られている。

SII437 竪穴遺構 南北245 cm以上、東西210 cm以上で平面形は不明である。深さは残存状況の良好な箇所で70 cm程である。b区の東壁際に至って10 cm程溝状に落ち込んでいる。堆積土は暗褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土である。

遺物は土師器、須恵器の 小片が少量と、底面から長 さ 35 cm、幅 17 cm、厚さ 11 cm の河原石が出土して いる。

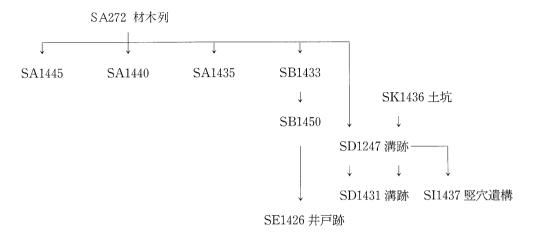
SD1427 溝跡を切っている。



第37図 第100次調査遺構配置図 (b区北部)

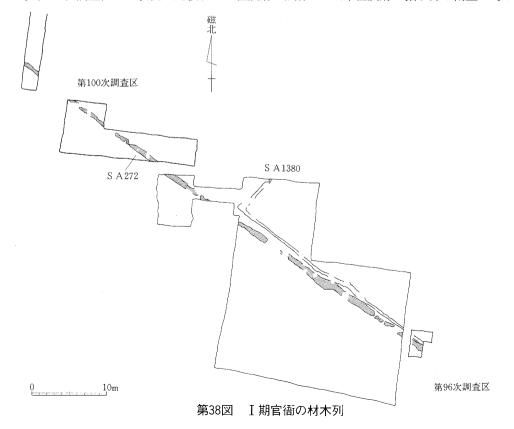
3. ま と め

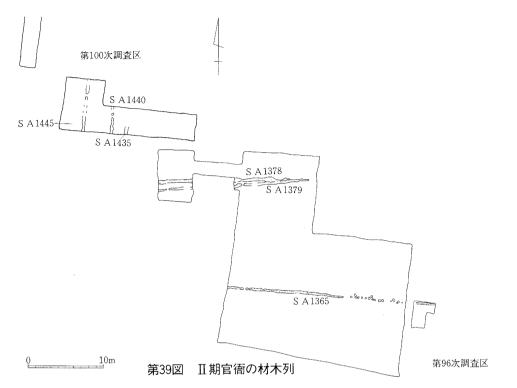
発見された遺構は、材木列4条、掘立柱建物跡2棟、土坑1期、井戸跡2基、堅穴遺構1基、ピットなどである。重複関係を見ると以下のようになる。



(1) I期官衙の遺構……SA272

SA272 材木列は、昨年度の第96次調査区で検出したSA272 材木列の西延長上で検出された。第96次調査区での状況と比較すると柱痕跡の残存がよく、柱痕跡が掘り方の南壁に寄って





いるという特徴がみられる。攪乱の著しい箇所では途切れているが調査区を横断し、さらに西に延びている。 I 期官衙の南限を区画していると考えられる。 I 期官衙の南辺・西辺については第 99 次調査区と合わせて「VI 総括」の中でさらに検討する。

(2) II期官衙の遺構群……SAI435、SAI440、SAI445 材木列

SB1433、SB1450 掘立柱建物跡

3列の材木列は攪乱により一部で途切れてはいるが、調査区を南北方向へ横断していると考えられる。昨年度の第96次調査区でも3列の材木列(SA1365、SA1378、SA1379)が東西方向に横断していた。第96次調査の3列の材木列にはSA1445材木列のような幅の広い抜き取りは認められなかったが、布掘り幅や材痕跡は今回検出した材木列とほぼ同じ規模である。周辺の調査や旧河道の存在から第96次調査の東西方向の材木列がこのまま大きく西方向に延びるとは今のところ考えにくい状況にある。したがって第96次調査で検出された3列の材木列がL字形に北へ曲がって今回検出された3列の材木列に接続していたと推定しておきたい。今回検出された材木列はいずれももっとも南で検出されているSA1365材木列とほぼ直交しているが、各々の対応関係や時期差については不明である。

昨年度と今年度の調査により、II期官衙段階には方四町II期官衙の南西外にも材木列で区画された官衙ブロックが存在したことが明らかになった。こうした官衙ブロックがII期官衙の中でどういった機能を果していたかについては今後の課題であろう。

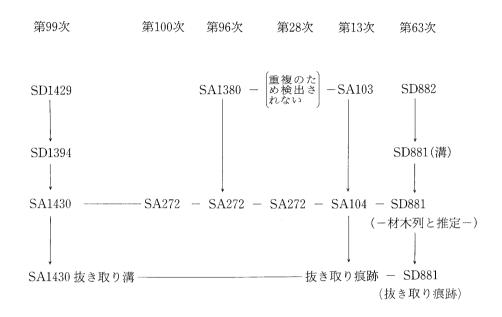
VI 総 括

今年度は第3次5ヵ年計画の4年次にあたり、当初はII期官衙と同時期の郡山廃寺の中枢伽藍東部の調査予定であった。仙台市の進める再開発事業の範囲がI期官衙の南西部に及ぶことになるため、早急に遺跡の内容を把握する必要があり、当初の調査地区を変更して第99次と第100次の発掘調査を実施した。さらに個人住宅建築に伴う発掘届が提出され、小規模な事前調査を第98次調査として実施した。第99次調査と第100次調査では昨年度に引き続き、主にI期官衙の南辺、西辺と考えられる遺構を検出した。第98次調査は調査面積がきわめて小さいため、堅穴住居跡などの一部を検出しただけである。

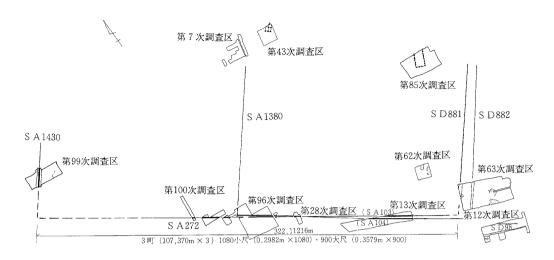
1. I 期官衙の調査

昨年の第96次調査区で検出した I 期官衙の材木列2列のうち SA272 材木列は調査区外の西 に延び、SA272 材木列より古い SA1380 材木列は調査区内で北へ L 字に曲がっていた。2 列の 材木列とも I 期官衙の南限を区画していると考えられ、東方の第13次・第28次調査で検出し た材木列に接続していたと推定した(註 11)。この調査地区より西に 300 m 程離れた長町駅東遺 跡の調査(註12)では、直接官衙に関わる遺構は認められなかった。その間ではこれまで小規 模な発掘調査が実施されただけで、I期官衙の様相は明らかになっていない。したがって西に 延びる SA272 材木列がどこまで延びているかが I 期官衙の西限を明らかにする上で重要と考 えられた。第 100 次調査では第 96 次調査区で検出した SA272 材木列の延長線上で材木列が検 出され、さらに西に延びていた。さらにその延長上である長町駅東遺跡の E-3 トレンチまでは 延びていない。その途中で発掘可能な地点がないため、北にやや外れた地点で第 99 次調査を実 施したのである。そこで SA272 材木列にほぼ直交するように SD1394・SD1429 溝跡、SA1430 材木列、SA1430 材木列抜き取り溝などが発見された。SA1430 材木列の掘り方や柱痕跡は方四 町II期官衙の外郭となる材木列と比較しても、柱痕跡がやや小さいだけで同様の規模を持って いる。さらにこの材木列は徹底した抜き取りをうけ、材木列掘り方の底面まで及んでいる箇所 がある。そこでは材痕跡はまったく検出されず、断面形がV字状の抜き取り溝のみが SD1394、 SD1429 溝跡と重複しているだけである。このような特徴を持つ遺構としては昭和 61 年(1986) の第 63 次調査で検出されている SD881 南北溝跡をあげることができる。調査当時、SD881 溝 跡はやや埋まりかけてから V 字形に深く掘り直したと捉えていた。しかし今回 SD881 溝跡に ついて再検討したところ、平面形・断面形の特徴は今回の調査での抜き取り溝と溝跡との重複 ときわめて類似している。したがって SD881 溝跡の場合も溝跡→ (材木列) →抜き取り溝の重 複と見ることも可能である。SD881 溝跡の位置や方向、およびこの溝跡より東では I 期官衙の

遺構が少なくなることなどから見て、これを I 期官衙の東辺と推定することもできよう。これまでの調査で発見された I 期官衙の南端での遺構を整理すると以下のようになる。



第63次調査区では SD881 溝跡の他に I 期官衙の遺構として SD882 南北溝跡がある。規模や方向は SD881 溝跡と同様である。SA1380 と SA103 材木列が東辺においてどのような遺構と接続しているのかは明らかでないが、今回のように抜き取り痕跡が材木列掘り方底面まで及んでいるような状況を考えると、SD882 溝跡に接続していた可能性もあろう。SA272 と SA104 材木列は昨年度検討したとおり同一の遺構と考えられた。第13次調査でも抜き取り痕跡が検出されており、第96次調査区のSA272材木列も同様に理解したが (註13)、今回の第100次調査では抜き取り痕跡は全く認められなかった。これについては、上部のみ開削し一定の深さで切り取られたもので、今回の調査地では削平がきわめて著しいために上部の柱切り取り痕跡が検出されなかったものと見ておきたい。このように I 期官衙南端における遺構の重複を見てくると、材木列による区画が最終段階で抜き取りあるいは切り取りと言えるような作業が行なわれたものと推定される。ただし SA272 材木列と SA1430 材木列の材痕跡の大きさに違いがあり、今後検討しなければならない点もある。今のところ遺跡南側で観察される旧河道による段差が 1~1.5 m あり、それに関連して遮蔽施設の規模に違いが出た可能性を考えておきたい。



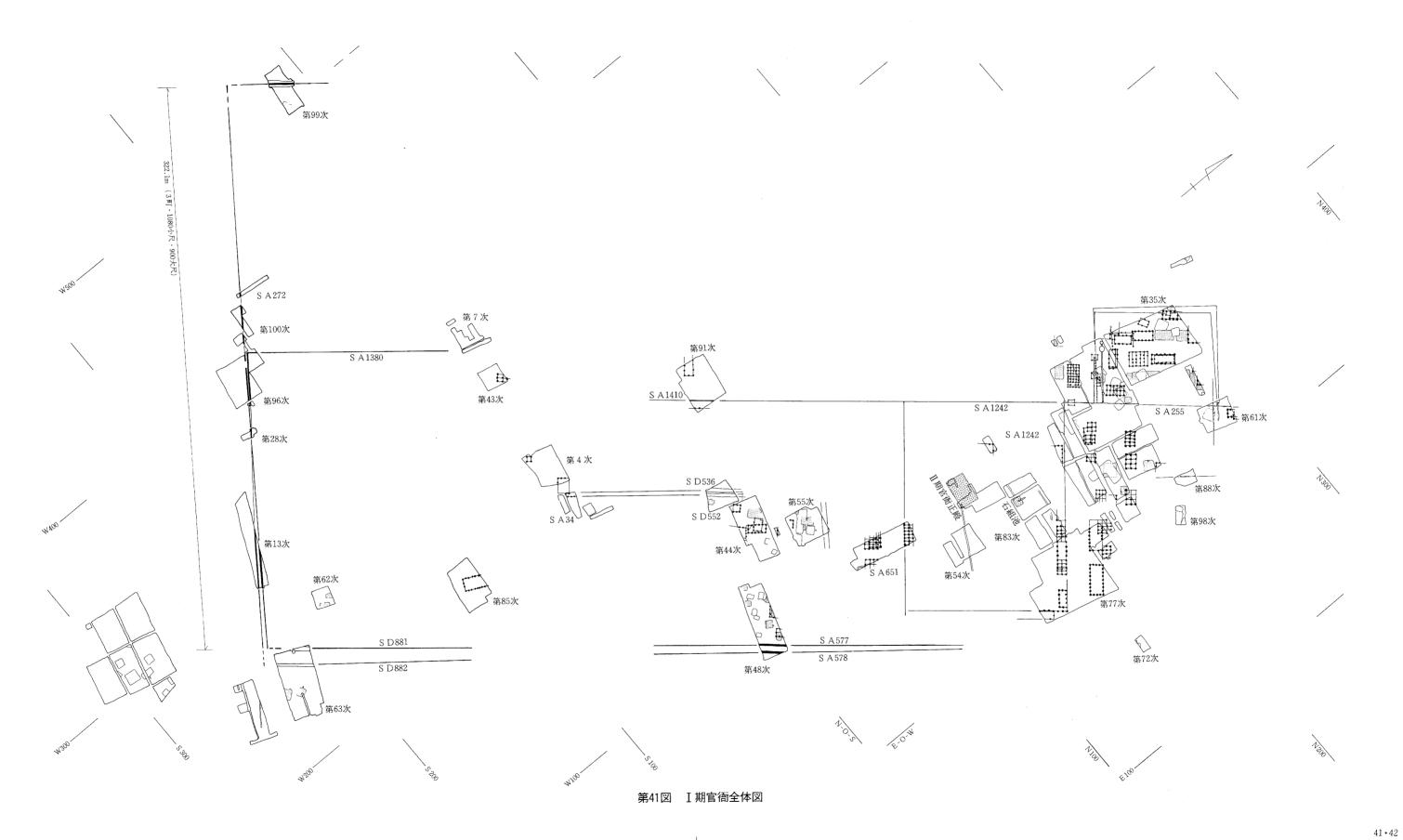
第40回 【期官衙南部遺構配置図

今回明らかになった遺構の状況から I 期官衙の南端部における様相を検討してきた。それにより SD881 南北溝跡に材木列との重複があり、それが SA272 材木列および SA1430 材木列と接続して区画を構成していた場合についてさらに検討してみたい。各接続部のコーナーは検出されていないので推定の域を出ないが、仮に第 40 図のように図上で東南コーナーと西南コーナーを求めるとその間の距離は 322.11216…m となる。これを町、令小尺(唐尺)、令大尺(高麗尺)で標記すると、

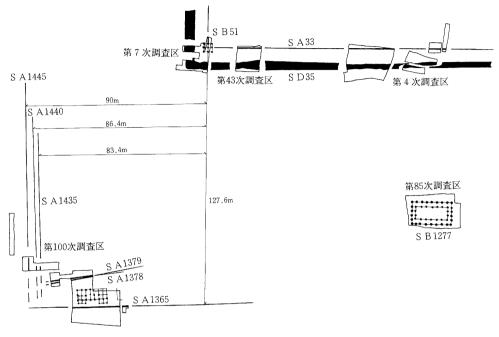
322.11216 m≒107.370 m×3 (3 町) 0.2982 m×1080.18 (1080 小尺) 0.3579 m×900.00 (900大尺)

となり、大尺ではきわめて区切りのよい数値となる。ただし郡山遺跡の I 期官衙の遺構配置(第41 図参照) を見ると小尺でも測定できる箇所もあり、大尺により造営されたのかについては I 期官衙内部についてさらに検討する必要がある。ここでは可能性を指摘するに留めたい。

今年度の調査により I 期官衙の東西幅が想定できた。これまでの調査で I 期官衙の遺構は SA272 材木列の北で $560\,\mathrm{m}$ まで確認されている。したがって I 期官衙の広がりは東西 $322\,\mathrm{m}\times$ 南北 $560\,\mathrm{m}$ 以上であり、7世紀の後半代の地方官衙のあり方を知る上で貴重な成果を上げたと 考えられる。



方四町Ⅱ期官衙



第42図 Ⅱ期官衙西南部遺構配置図

2. II期官衙の調査

第 100 次調査区で検出された 3 列の材木列 (SA1435、SA1440、SA1445) は、昨年度の第 96 次調査区で発見されていた 3 列の材木列 (SA1365、SA1378、SA1379) が北に L 字に曲がったものと推定される。これらの材木列によって区画されたブロックは II 期官衙の外郭西辺材木列から西へ 83~90 m、南辺材木列から最も南の SA1365 までは 127.6 m である。とくに昨年の調査では内部の建物跡が総柱の建物や床束をもつ建物跡など倉庫ふうの建物跡である点が注目される。この官衙ブロックの性格については、II 期官衙との配置や規則性など周辺の調査成果の蓄積を待って検討していきたい。

註 • 参考文献

度々、引用される郡山遺跡調査概報については次のとおりである。

「郡山報 I 」 仙台市文化財調査報告書第23集「年報 I | 『郡山遺跡発掘調査概報』1980

〃 第 46 集「郡山遺跡Ⅲ」1983 ル 第 64 集「郡山遺跡IV」1984 「郡山Ш」 「郡山IV」 「郡山Ⅴ」 ッ 第 74 集「郡山遺跡 V | 1985 「郡山VII 第 86 集「郡山遺跡VI」1986 「郡山VII」 ル 第 96 集「郡山遺跡Ⅶ | 1987 「郡山VIII」 ッ第110集「郡山遺跡VIII」1988 ッ第 124 集「郡山遺跡IX」1989 「郡山IX」 「郡山X」 ッ第133集「郡山遺跡X | 1990 「郡山XII ル 第 146 集「郡山遺跡 XI」1991 「郡山XII」 // 第 161 集「郡山遺跡XII | 1992

「郡山XIII」 n 第 169 集「郡山遺跡 X III 」 1993

註1 「郡山IX上

註2 中村浩「和泉陶邑窯の研究」柏書房1981

註3 「郡山V」

とくに第 43 次調査 SD35 溝跡出土の土師器 C-500 坏とは、形態は違うが内外面の調整、胎土、焼成などが同様である。

註 4 八幡太神南遺跡 A 1号住居跡

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 46 集「立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢」1985

東日本埋蔵文化財研究会「第 3 回東日本埋蔵文化財研究会 古代官衙の終末をめぐる諸問題-第II分冊 県別資料報告-」1984

註5 「郡山VI」第55次調査

本遺跡ではこれらの遺構を竪穴建物跡として扱っている。

- 註6 I期官衙の方向性については調査地点によりばらつきがあり、26°~40°ほど東へ振れている。
- 註7 仙台市文化財調查報告書第43集「栗遺跡」1982
- 註8 註7に同じ
- 註9 古代の土器研究会編「古代の土器1 都城の土器集成 | 1992
- 註10 宮城県亘理町「亘理の古墳」1975
- 註11 「郡山XIII」
- 註 12 仙台市文化財調査報告書第 170 集「仙台平野の遺跡群 🗷 」 1993 長町貨物ヤード跡地
- 註13 註11に同じ

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

年	月日	行 事 名 称	担当職員	主 催
5.	7.9	社員研修講話「仙台市の文化財」	木村	日本メックス株式会社
	8.5 ~ 7	第 21 回サマーセミナー発表	長島	古代史サマーセミナー
	9.26	ふるさと太白再発見 文化財めぐり「郡山から多賀城への道」	木村	中田市民センター
	10.19	遺跡見学会	長島・熊谷	仙台歷訪会
	10.21	遺跡・施設めぐり	木村	一番町市民センター
	11.5	遺跡見学会	長島	貝ヶ森市民センター
	11.25	第 99 次·100 次調査報道発表	長島	仙台市教育委員会
	11.27	現地説明会	長島・熊谷	仙台市教育委員会
	12.18	宮城県内発掘調査成果発表会	長島	宮城県教育委員会
6.	2.18	第6回地域文化考講座 パネルディスカッション 『わが町の「今昔と街づくり」を語る』	木村	八本松市民センター
	2 .26 27	第 19 回古代城柵官衙遺跡検討会	長島・熊谷	

2. 調查成果執筆

河北新報11月9日~2月1日 10回連載

『白鳳の北都』

- 幻の古代城柵・郡山遺跡- 白鳥

3. 調査指導委員会の開催

第22回 郡山調査指導委員会 6年3月16日 北庁舎4F第1会議室

- ○平成5年度の事業報告について
- ○平成6年度の調査計画について

仙台市博物館 常設展「原始・古代・中世」

八本松市民センター 「郡山遺跡資料展示」

写 真 図 版





図版 1 第98次調査区全景 (東より)

図版 2 S I 1386竪穴住居跡 全景(南より)



図版 3 S I 1386遺物出土状況 C-731高坏(北より)





図版 4 S I 1389竪穴住居跡 全景(南より)



図版 5 S I 1389竪穴住居跡 カマド(南西より)

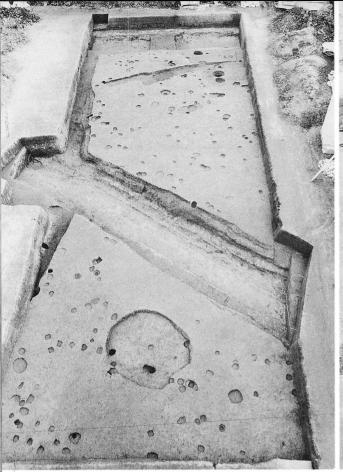


図版 6 S I 1389遺物出土状況 C-724坏(北より)



図版 7 S I 1391竪穴住居跡 掘り方底面(東より)

図版 8 S A 1392柱穴 セクション(北より)



図版 9 第99次調査区全景 (西より)



図版10 S A 1430材木列・抜き取り溝 S D 1394溝跡・S D 1429溝跡 全景(南西より)



図版11 S A 1430材木列 抜き取り溝 S D 1394溝跡 S D 1429溝跡 土層断面 (北東より)



図版12 S A 1430抜き取り溝 遺物出土状況 E - 371 聴



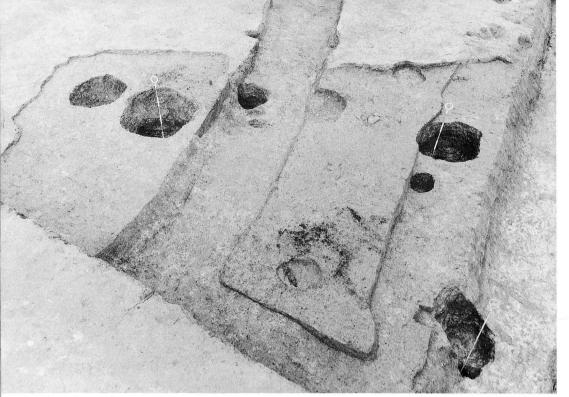
図版13 SA1430抜き取り溝 遺物出土状況 E-370甕

図版14 S D1394溝跡 遺物出土状況 C-739坏 E-369甕



図版15 S D1394溝跡 遺物出土状況全景(南西より)







図版16 S I 1400竪穴住居跡 全景(南より)

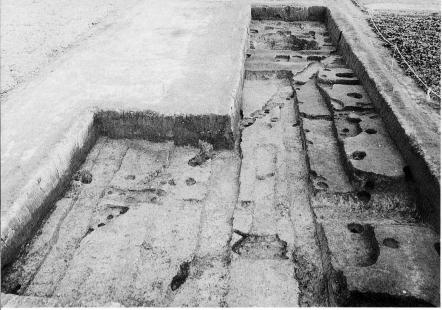
図版17 S D1397溝跡全景 (南より)



図版18 第100次調査区遠景 (東より)



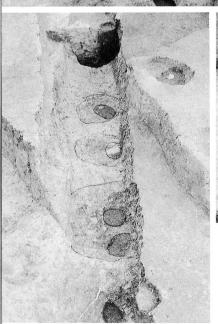
図版19 第100次調査区全景① (東より)

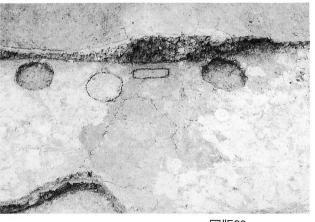


図版20 第100次調査区 a 区 全景②(西より)



図版21 S A272材木列全景 (南東より)





図版23 SA272 材木列底面

図版22 SA272 材木列 柱痕跡(北より)



図版24 左からSA1435・SA1440 SA1445材木列全景 (北より)



図版25 SB1433・SB1450掘立柱 建物跡全景(北より)



図版26 第100次調査区 b 区 S A 272材木列検出状況① (東より)

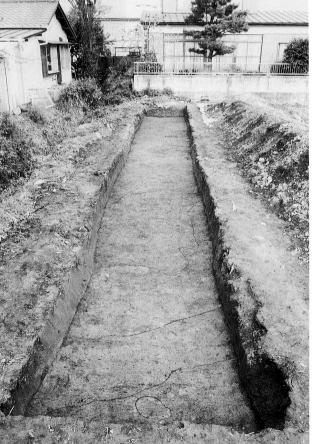


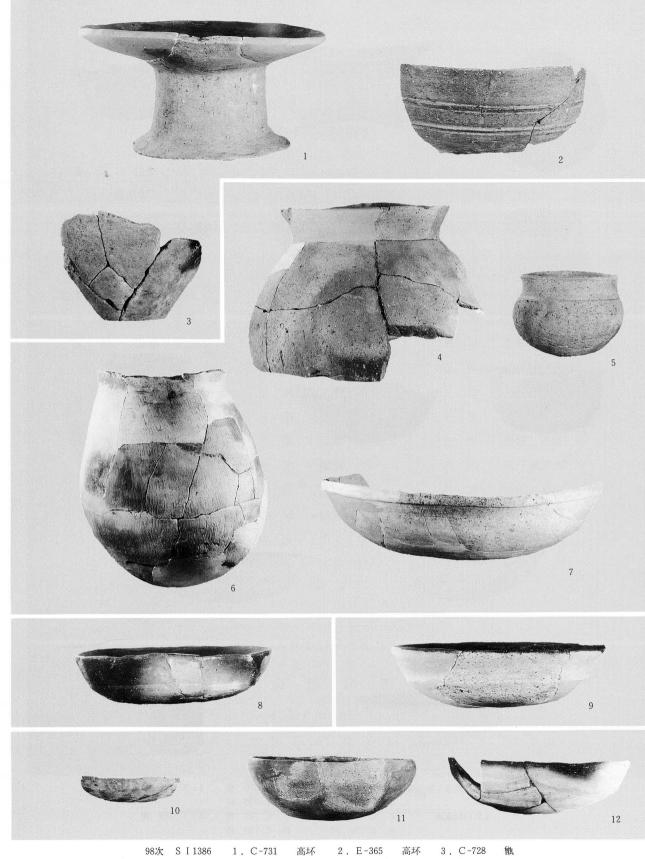
図版27 S A 272材木列検出状況② (東より)

図版28 第100次調査区 b区全景 (南より)

図版29 第100次調査区 c区遺構確認 状況(南より)





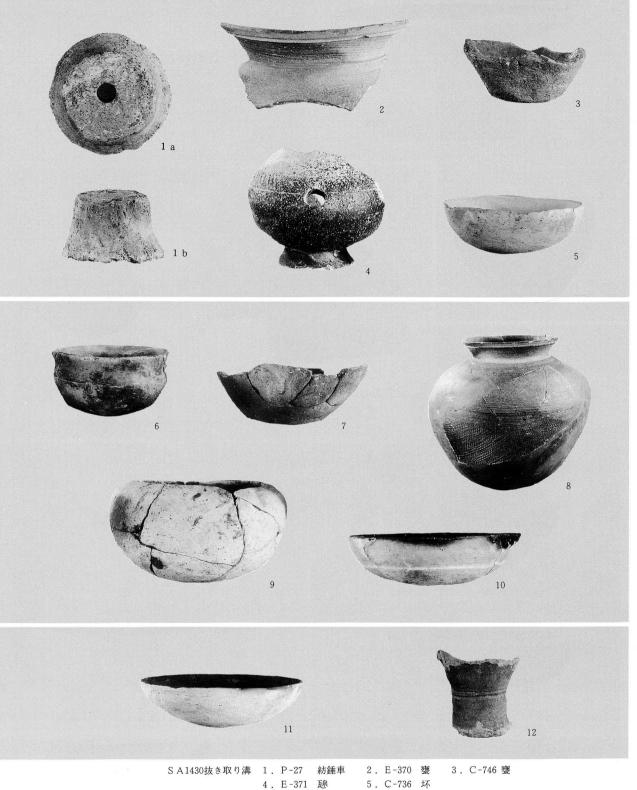


S I 1389 4. C-721 甕 5. C-724壺

6. C-720 甕 7. E-364 皿

S D1384 8. C-725 坏 表採 9. C-730

99次 S A 1430抜き取り溝 10. C-738坏 11. C-745坏 12. C-755坏



S D1394溝跡

6. C-732 坏

9. C-739 坏

7. C-742 甕

8. E-369 甕

S D1438溝跡

11. C-747 坏

10. C-750 坏

12. E-368 壺

図版31 第99次調査出土遺物

文化財課職員録

課	長	白鳥	良一					
	〔管理係〕 〔調査第					查第一位		
係	長	菅原	澄雄			係	長	田中
主	任	村上	道子			主	任	木村
主	事	福井	健司			教	諭	佐菔
主	事	庄司	厚			主	任	司吉
主	事	齋藤	英治			主	事	金森
主	事	佐藤	寿江	,		教	諭	小川
						主	事	工惠
						主	事	主涉

	査第二係)	〔調			査第一係)	〔調	
慎一	結城	長	係	則和	田中	長	係
信彦	篠原	任	主	浩二	木村	任	主
昭夫	太田	諭	教	好一	佐藤	諭	教
洋	佐藤	任	主	恭平	吉岡	任	主
甲二	佐藤	事	主	安孝	金森	事	主
弘美	渡部	事	主	淳一	小川	諭	教
言一郎	工藤仁	事	主	哲司	工藤	事	主
格	荒井	事	主	光朗	主浜	事	主
洋	中富	事	主	裕彦	斎野	事	主
亮輔	平間	事	主	榮一	長島	事	主
康洋	五十点	諭	教	俊一	稲葉	諭	教
浩志	神成	諭	教	裕樹	菅原	諭	教
靖章	赤澤	諭	教	紀	渡部	事	主
幸司	竹田	諭	教	秀一	川名	諭	教
淳	佐藤	事	主	裕行	熊谷	諭	教

仙台市文化財調查報告書第178集

平成5年度

郡 山 遺 跡 XW— 平成 5 年度発掘調査概報 — 平 成 6 年 3 月

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト 仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

